

SUMS News



「第35回 碧鈴祭」を開催しました

11月8日(土)～9日(日)2日間にわたり、白子キャンパスにおいて「第35回 碧鈴祭」を開催しました。今年度の碧鈴祭は『響け、碧のチカラ～Step into the Future～』をテーマに、大学祭を運営するなかで、ご来場の皆さまはもちろんのこと、関わる全ての人に笑顔で過ごしていただけるよう取り組みました。

期間中は、2日間を通して各学科(専攻)の発表、クラブ・サークルによるステージや展示、学生等団体による模擬店の出店、実行委員会による来場者参加型の企画を行いました。さらに、1日目にはMakiによる音楽LIVE、2日目はラバーガール・9番街レトロによるお笑いLIVE、クロミLIVE、日本lilypan舞踊芸術団など、盛り沢山の内容で充実した大学祭となりました。

両日ともにご参加いただいた皆さまに盛り上げていただき、ご来場者・大学祭スタッフともに多くの笑顔につつまれ、テーマ通りの碧鈴祭を成し遂げることができました。

碧鈴祭の開催にあたりご協力いただいた本学教職員・学生の皆さん、その他碧鈴祭にご参加・ご来場いただいたすべての皆さまに厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

＜学生課＞



碧鈴祭 学科発表のご報告

理学療法学専攻 学祭発表

保健衛生学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻 2年 青木 俊将

理学療法学専攻では、「脳トレーニング」「コーンホール体験会」「体組成・バランス能力測定」の3つの企画を行いました。

脳トレーニングには幅広い年代の方々に参加していただき、信号の色に合わせて動作を変える信号脳トレでは、小さなお子さまや高齢の方でも上手に取り組む姿が見られ「難しいけど面白い」「簡単そうにみえて結構頭使うね」という声を多くいただきました。足踏みと計算を同時に行うデュアルタスクにも挑戦していただきましたが、実際に運営している私たちでも思わず間違えてしまうほど難しく、来場者と一緒に楽しみながら取り組むことができました。

コーンホールではトランプを使って投げる距離や回数に変化をつけ、来場者それぞれに合った負荷を楽しんでいたような工夫をしました。特に小さなお子さまの参加が多く、上手いいかなくても一生懸命挑戦する姿が見られました。成功した瞬間には笑顔と歓声があふれ親子で楽しむ場面も多くありました。

体組成・バランス能力測定では、自分の身体の状態を知りたいという来場者が多く、結果に驚かれる方や今後の運動に活かしたいと話される方もいらっしゃいました。学生が説明をしながら測定を進めることで、来場者との交流も深まりました。準備は大変でしたが、学生全員で協力し、来場者の皆さまに楽しんでいただける企画を作り上げることができました。



来場者も展示者も楽しめる自作ハード・ソフトの体験型展示

医用工学部 医療健康データサイエンス学科 2年 吉澤 穂乃佳

医療健康データサイエンス学科の学科発表では、皆が楽しめる自作クレーンゲーム体験、自作パソコンゲーム体験、対話型生成AIによる画像作成体験など、身に付けた創造力を発揮し5つのデータサイエンスに関する体験型展示を行いました。

自作パソコンゲーム体験は多くの子どもたちがプレイし、さらにゲームの自作体験もしてみたいとの声をいただき、展示者の意図が伝わったことに嬉しくなりました。生成AI体験は意外にも幅広い層に人気があり、理想の画像に近づけようと様々にプロンプトを変更し、試行錯誤をしていただけました。また、子どもから大人まで楽しめる自作クレーンゲームは、初日に少し機械トラブルがありましたが、応急処置を行って2日目は上手く動作し、両日とも大人気の良い展示になりました。2日目はあいにくの天気になりましたが、本学科の来場者は計720名（1日目450名、2日目270名）となり、深く感謝しています。

全体を通して人手不足や当日のトラブルなどもありましたが、来場者も展示者も皆が楽しめる素敵な展示になりました。改めて、学科展示に関わった学生の皆さん、先生方、来場いただいた全ての方に感謝いたします。本当にありがとうございました。

看護学科 見て・触れて・学べる看護体験

看護学部 看護学科・碧鈴祭 看護学科実行委員長 2年 星野 佑成

私たちの学科は、参加者が健康について少しでも興味を持っていただける企画を準備しました。時には様々な課題もありましたが、大学祭メンバーと協力し、約600名もの来場者があり、盛況に大学祭を終えることができました。下記に催し物を紹介します。

- (1)衛生学的手洗い：蛍光塗料を汚れに見立てて、手洗後にブラックライトで照らし、実際の程度のウイルスや細菌を除去できるかを可視化し確認していただきました。参加者は、「手が光って面白かった」「思ったよりも汚れが残っていて驚いた。手洗いを見直そうと思った」など、珍しい体験に驚かれていました。
- (2)高齢者疑似体験：ゴーグルを着用して高齢者の目の見えにくさの体験や、関節を動きにくくする器具や重りを付けた状態で、立ち上がりや歩行体験をしていただきました。「想像より体が動かしにくくて驚いた」「高齢者の生活の大変さが分かったので、ペースに合わせて優しく接しよう」などの声があり、高齢者に対する理解が得られました。
- (3)クイズ：人体の構造についてのクイズを出題し、人体模型を用いた解説を行いました。参加者からは「間違えても説明が分かりやすく、楽しく学べた」など感想をいただき、皆さん笑顔で楽しまれていました。

今後、この経験を通じてもっとたくさんの方々に健康に興味を持っていただけるような活動をしていければと考えています。



全5問〇×クイズの様子

強化指定クラブ「女子バスケットボール部」が 東海学生バスケットボール2部リーグ戦で全勝優勝しました！

強化指定クラブ「女子バスケットボール部」マネージャー
保健衛生学部 鍼灸サイエンス学科 2年 早川 葵葉

9月6日(土)から7週間に渡って開催された「第96回東海学生バスケットボール・2部リーグ戦」において、強化指定クラブ「女子バスケットボール部」が全勝で優勝しました。

この大会を通じて、最優秀選手賞と優秀選手賞に本学の選手が選出され、表彰を受けました。また、惜しくも得点王は逃したものの、医療栄養学科1年の瀬利心花さんが得点ランキングで2位と健闘しました。

2部リーグ1位となった本学は、この結果を受け、11月8日・9日に中部学院大学関キャンパスで開催された「1・2部入替戦」への出場権を獲得し、1部8位の中部大学と対戦しました。入替戦は2試合方式で行われ、第1戦は65対72(-7点差)で惜しくも敗れ、翌日の第2戦へ臨みました。第2戦では63対58(+5点差)で勝利したものの、1勝1敗・得失点差「-2点」となり、僅差ではありましたが、惜しくも来季の1部昇格は叶わず2部残留が決まりました。

令和5年のチーム発足以降、初年度には3部昇格、昨年度には2部昇格と着実にステップを重ねてきましたが、今回の結果を受けて、改めて1部の壁の高さを実感する機会となりました。ただ、1部に所属する各大学は、歴史もあり部員も1年生から4年生まで揃っていますが、本学女子バスケットボール部は、1・2年生のみで構成される創部3年目の若いチームです。

今後もさらなる成長を目指して取り組んでまいりますので、引き続き温かいご声援をよろしくお願いいたします。

【東海学生バスケットボールリーグ 2部リーグ】

最優秀選手賞 大野 優里亜さん(鍼灸サイエンス学科 2年)

優秀選手賞 盛 優衣さん(鍼灸サイエンス学科 2年)

＜学生課＞



卓球部学生「第57回東海学生卓球各部別大会」で優勝しました

11月29日(土)名古屋市北スポーツセンターで開催された「第57回東海学生卓球各部別大会」において、卓球部の西村玲美さん(リハビリテーション学科 理学療法学専攻 1年)が＜女子3・4部シングルス＞の部で優勝しました。

西村さんは小学4年生から卓球を続けており、高校時代には県予選で優勝し、インターハイに出場したこともある実力者です。本学入学後も各種大会で好成績を収めるとともに、三重県代表として全国レベルの大会に出場するなど活躍しています。今回の大会で優勝したことから、西村さんは、翌年度に開催される「オール西日本大学卓球選手権大会」の出場権を獲得しました。

今後ますますの活躍が期待される西村さんに、皆さまの温かいご声援をよろしくお願いいたします。
＜卓球部・学生課＞



医療栄養学科教員「全国栄養士養成施設協会会長顕彰」を受賞

保健衛生学部 医療栄養学科長 三浦 俊宏

保健衛生学部医療栄養学科の若林成知教授が、全国栄養士養成施設協会より令和7年度「栄養士・管理栄養士養成施設の教員に対する会長顕彰」を受賞されました。本顕彰は、栄養士・管理栄養士の養成に関する教育・研究・社会貢献において、顕著な功績を挙げた教員を表彰するものです。

若林教授は、「青少年のための科学の祭典」や「ジュニアドクター育成塾」などを通じて、本学科の学生とともに食品を題材とした体験的な科学啓発活動を展開し、子どもたちの食品や栄養への関心を高め、科学的探究心を育ててこられました。また、これらの経験を教育に還元し、「生物有機化学」の授業においても体験的学びの視点を大切にされています。

一方で、生体分子の精緻な仕組みを手本に、新たな機能をもつ人工分子の創出を目指す有機化学研究を推進し、研究成果を国際的な主要学術誌に発表してこられました。卒業研究においては、こうした基礎研究を重視した指導を通じて、将来の学術を担う管理栄養士の育成にも尽力されています。

今回の受賞は、長年にわたる教育・研究活動に加え、社会貢献への継続的な取り組みが高く評価されたものです。今後のさらなるご活躍を祈念し、医療栄養学科教員一同、心よりお祝い申し上げます。



本学、松阪メディカルメンバーズ、 三十三地域創生との「産学連携に関する包括協定」を締結

本学は、松阪市内に拠点を置く医療機器関連6社で構成する「松阪メディカルメンバーズ(MMM)」および三十三銀行のビジネスパートナーである「三十三地域創生株式会社」の三者で、産学連携の包括協定を締結しました。調印式に出席したMMM 橋本耕成代表(橋本電子株式会社 代表取締役社長)、三十三地域創生株式会社 熱田渉代表取締役社長、本学 高木純一理事長がそれぞれの期待を述べ、調印を交わしました。

本連携は、2022年に三十三地域創生株式会社によるマッチングをきっかけに始まり、本学での展示会開催などを通じて関係を深めてきました。

本協定により今後はそれぞれの強みを生かし、医療現場のニーズを反映した新製品・医療機器の研究開発や、大学との共同研究、教育連携に取り組みます。学生のインターンシップの実施や就職支援、企業との交流機会の創出を通じて、学生が在学中から実践的な経験を積み、卒業後の進路の選択肢をさらに広げられる環境づくりを進めていきます。

今回の包括協定締結を機に三者が継続的な連携を推進し、地域社会の健康・医療・福祉に貢献するという共通理念のもと、学術研究及び教育活動の活性化、構成企業の発展、並びに地域創生活動の促進を図っていきます。 <企画広報課>



三十三総研 熱田社長、本学 高木理事長、MMM 橋本代表

シミズ病院グループ 医療法人清仁会との包括連携協定を締結

11月26日(水)京都市を中心に医療・介護事業を展開するシミズ病院グループ 医療法人清仁会と本学は、包括連携に関する協定を締結しました。本協定は、両者が人的・物的資源を活用し、相互に連携協力することにより、質の高い地域医療と優れた医療人育成に貢献することを目的としています。

シミズ病院グループは、シミズ病院・洛西シミズ病院・洛西ニュータウン病院・亀岡シミズ病院の4病院を中心に、「超急性期」から「回復期」「慢性期」「在宅」へ向けての支援まで、地域に根差した医療・介護を展開しています。

今後は、本学学生の実習受け入れ、就職支援における連携、教員の研究に関する協力、地域医療等への貢献に関することなど、相互に連携と協力を深め、皆さまの健康・医療・福祉に貢献していきます。 <企画広報課>



医療法人清仁会 清水史記理事長と本学 高木久代副学長

第10回日本薬膳学会学術総会、市民公開講座を開催

日本薬膳学会学術総会 事務局長・鍼灸サイエンス学科長 山本 晃久

12月7日(日)白子キャンパスにて、「新しい薬膳への挑戦」をテーマに第10回日本薬膳学会学術総会を開催しました。

市民公開講座では、タレントで、国際薬膳師資格認定機構役員である麻木久仁子さんが「薬膳とわたし」と題して、薬膳を学ばれた背景と魅力について解りやすくお話されました。また、薬膳ランチセミナーでは、高木久代代表理事より「心も体も温まる健美薬膳」と題して、本学で調理した薬膳弁当の内容と体を整える旬の食材について解説されました。

学術総会では、高木代表理事、豊田長康学長、長村洋一大会長、三浦俊宏教授、浦田繁教授によるシンポジウムが開催され、薬膳のこれからの方向性と将来像の実現に向けた指針が示されました。その後、原 英彰岐阜薬科大学理事長による「ウェルビーイングにおける薬膳の役割」、栃谷史郎教授による「母体腸内細菌叢の世代を超えるはたらき」、史 麗萍天津中医薬大学教授による「中国の薬膳の現状」について興味深い内容のご講演をいただきました。講演内容は海外にライブ配信され、中国、台湾などの専門家の方々が見聴されました。

企業展示も出展いただき、学会と共同開発した商品が即日販売されました。会員の方々は元より、学生たちも参加し、薬膳・食養生の最新事情について教養を深めた内容の濃い第10回記念の学術総会になりました。講演後は、薬膳パーティーが開催され、ご参加いただいた方々の親睦も深めることができました。



桑名市市民公開講座で高木久代副学長が講演



11月30日(日)桑名市にて、市民公開講座「葉膳ってなに？」が開催され、本学副学長で日本葉膳学会代表理事の高木久代教授が講師を務めました。

本学と桑名市は2024年12月に、地域の健康づくりや教育・研究分野の連携を目的に包括連携協定を締結しており、本講座はその連携事業の一環として開催されたものです。女性のウェルビーイングなまちの実現を目指す桑名市は、女性の心と体の健康をテーマとした全5回の市民講座を企画しており、第1回と第3回の講座で高木副学長が葉膳について講演します。

当日は約60名の方が参加され、葉膳の基礎知識や日々の食生活への取り入れ方について理解を深めていただきました。講座では高木副学長が、食材の特性を理解し、季節・年齢・性別・体質に合わせて選ぶことの重要性を分かりやすく解説しました。特にこれから迎える冬は寒さで身体に不調を招きやすい季節であるとして、ショウガやネギ、ラム肉など身体を温める食材の活用法を紹介しました。講演後には、高木副学長の説明を聞きながら「鰯と根野菜の酒粕煮」「豚バラ肉の柔らか煮八角風味」「もち麦生姜ご飯」などを盛り込んで本学で調理した葉膳弁当を味わい、葉膳の魅力を感じていただきました。

＜企画広報課＞

市民公開講座「災害関連死ゼロを目指した避難生活体験研修 ～応用編～」を開催

12月20日(土)千代崎キャンパスにて、本学主催による市民公開講座「災害関連死ゼロを目指した避難生活体験研修 ～応用編～」を開催しました。当日は寒さ厳しい中、市民の皆さまと学生・教職員合わせて約30名の方にご参加いただきました。

今回の講座では、小学生から高齢者まで様々な年代の参加者が4班に分かれて、本学体育館を避難所とみなして、避難所運営を学ぶ体験型研修を開催しました。グループワークを通じて、避難所での生活を支えるために必要な視点や工夫を整理し、発表で共有しました。講師からは、避難所での安全・衛生・プライバシー確保、支援が必要な方への配慮など、押さえるべき基本ポイントを解説しました。

平時から地域の皆さまと大学との継続的なつながりが、災害に強いまちづくりには大切です。今回の市民公開講座をとらえて、地域の皆さまと学生・教職員が連携し、地域防災力がより高められる機会になったことと思います。次回は、基礎編(段ボールベッド組立体験等)を2月11日(水・祝)に千代崎キャンパスにおいて開催予定です。是非ご参加ください。

＜リハビリテーション学科 理学療法専攻・看護学科＞



日臨技中部圏支部医学検査学会 学生フォーラムで臨床検査学科学生が活躍

保健衛生学部 臨床検査学科 准教授 鈴木 真紀子

11月1日(土)・2日(日)の2日間、三重県総合文化センターにて、令和7年度日臨技中部圏支部医学検査学会(第63回)が開催され、中部6県の臨床検査技師や関係者が一堂に会しました。本学科からは、3年生全員が授業の一環として参加し、自身が目指す職業の先輩方の発表や討論に触れる貴重な機会となりました。

なかでも印象的だったのが、学会企画の一つである「学生フォーラム」です。臨床検査技師学生団体SOLSが企画から運営までを担い、本学科からも白上鈴果さん、鈴木琴葉さんの2名が運営メンバーとして参加しました。フォーラムには、本学の学生に加え、他大学の学生、臨床検査技師、養成校教員、日本臨床検査技師会の理事などが参加し、「臨床×教育×学生が語るコミュニケーションの未来」をテーマに、小グループでのディスカッションが行われました。

2日目には、1日目の内容のまとめ・振り返り・質疑応答が行われ、白上さんと鈴木さんが司会進行と全体の内容整理を担当しました。多職種・多世代の参加者の意見を丁寧に拾い上げ、わかりやすく会場に共有する姿は大変堂々としており、臨床検査技師を目指す一人の若い専門職として、そして本学科の学生として、非常に頼もしく誇らしく感じられる場面となりました。



学生フォーラムで司会進行を務める臨床検査学科 白上さんと鈴木さん

薬学研究科院生「ベストプレゼンテーション賞」を受賞

副学長(大学院・研究担当) 鈴木 宏治

10月26日(日)白子キャンパスにて、「日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同大会2025」が開催されました。



「若手が輝き躍動する薬学の未来」をテーマとして、570名ほどの参加者と200演題を超える、大変活気あふれる学術大会となりました。

近隣大学からの多くの興味深い研究演題発表があったなか、薬学研究科の大井勇秀院生は、「毒性終末糖化産物 (Toxic Advanced Glycation End-products: TAGE) による網膜-視神経系障害性とAGEs阻害剤による保護効果」について口頭発表を行い、ベストプレゼンテーション賞に選ばれました。大井院生らは糖尿病患者に多く存在するTAGEによる視神経障害機序を解析し、TAGEに起因する視神経の神経軸索変性が糖尿病網膜症の原因の一つになることを明らかにし、その制御の可能性を示して、高い評価をいただきました。本研究には、薬学科の古川絢子助教、郡山恵樹教授(指導教員)が共同研究者として参画しました。

医療科学研究科院生「日本摂食障害学会」で発表

保健衛生学部 医療福祉学科 臨床心理学専攻長 大橋 明

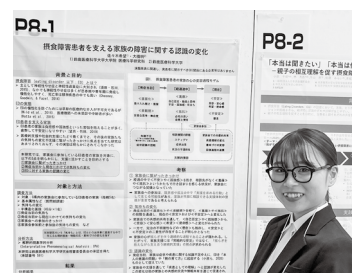
10月18日(土)～19日(日)第28回日本摂食障害学会*学術集会が東京国際交流館プラザ平成で開催され、臨床心理学分野に所属する佐々木希望さんがポスター発表を行いました。

佐々木さんは、摂食障害(以下、摂食症)の家族会に参加している方に面接調査を行い、発症から家族会とつながるまでの心理的变化を検討しました。

発症当初では自分の家族が摂食症であることに直面しつつ、大丈夫だろうと楽観視すること、経過途中では治らないことに対する自責感や支援窓口の少なさによる不安を抱えていることが認められました。家族会につながって以降は「本人や家族の責任」ではなく「病気として理解する」ようになっていくことが明らかになりましたが、この背景には家族会で思いを共有することによる孤独感の軽減や安心感が大きく関わっていました。なお、家族は「治るのか」という懸念もいつも持っていました。

発表時には、研究者や医療関係者だけではなく自助グループの運営者も聴講に訪れており、有意義な討論ができたようです。摂食症の患者は医療機関につながりにくく、家族も自らを否定的に捉え、疲弊することが極めて多いとされます。今回得た知見を、今後の臨床活動に役立ててくれることを期待しています。

*学会名は10月18日をもって「日本摂食症学会」と変更になりました



他学科連携プログラムの先行開講とアカデミックフェアの開催

医療人底力教育センター 浅田 啓嗣

「他学科連携プログラム」は、これまでの「医療人底力実践Ⅳ」を発展的に再構成し、2026年度より2年生を対象に開講予定の新科目です。学生が学科の枠を越えてチームを組み、地域や社会とのつながりを意識した課題に取り組むことで、実践的な学びと協働の力を育むことを目指しています。

今年度は本格実施に先立ち、学生の意見や要望を反映させることを目的に、試験的に開講しました。2～3年生25名が参加し、地域の施設・団体の活動支援やイベントの企画・運営など、実社会とつながる多様なプロジェクトに挑戦しました。

その成果を発表する場として、11月8日(土)に開催された碧鈴祭にて「アカデミックフェア」を実施しました。当日は6つの課題に関する成果をまとめた大型ポスターを展示し、学生たちが来場者に向けて活動内容を丁寧に説明しました。学生のご家族や地域の皆さまをはじめ、多くの方々が足を止め、熱心に耳を傾けてくださる様子が印象的でした。予想を上回る250名以上の方々にご来場いただき、会場は終始、活気に満ちた雰囲気に包まれていました。

参加した学生からは、「他学科の仲間と協力することで新たな視点を得られた」「地域の方々と関わるなかで、自分の学びの意味を実感できた」といった声が寄せられました。こうした貴重な意見をもとに、2026年度の本格開講に向けて、より充実したプログラムとなるよう準備を進めてまいります。



放射線技術科学科 6 名が 「令和 7 年度第一種放射線取扱主任者試験」に見事合格

保健衛生学部 放射線技術科学科 助教 鈴木 恵子

8月27日(水)、28日(木)に実施された令和7年度第一種放射線取扱主任者試験にて、放射線技術科学科の6名が合格しました。今年の全国受験者の合格率は28.9%でした。例年合格率が20~30%程度と、非常に難しい試験です。本学での学業と並行し、よく頑張って勉強してきた結果がこのように表れて大変うれしく思います。本当におめでとうございます！



- ◆一番苦労したのは、学習時間を確保することでした。大学の授業や実習があり、本格的に学習を始めたのは夏休みに入ってからでした。隙間時間などを活用し、苦手科目を中心に学習することで、点数を伸ばし、合格することができました。主任者試験を通して自分の勉強法に自信が持てるようになり、この経験を国家試験にも活かしていきたいです。(3年 沖田祥斗さん)
- ◆勉強を始めた当初はわからない問題が多く、この調子で合格できるのかとても不安でした。しかし、試験の傾向を把握して優先的に勉強するところを考えたり、動画でわからない部分を理解したり、自分なりに工夫して諦めずに勉強を続けることでどんどん解ける問題が増えていきました。その結果、試験に合格することができました。主任者試験を通して諦めないことの大切さを実感したので、この経験を今後にも活かしていきたいです。(2年 前 遥さん)

10月ピンクリボン月間 街頭啓発活動

ピンクリボン活動部顧問・放射線技術科学科 准教授 北岡 ひとみ

10月11日(土)白子駅前にて、ピンクリボン活動部所属の放射線技術科学科1~3年生14名とともに募金活動を行いました。乳がん検診の大切さを知っていただこうと、事前に作成したチラシや絆創膏を全部員でラッピングし、当日、笑顔で大きな声をかけながらチラシの配布と、JPOSHピンクリボン基金への募金活動を行いました。300名以上の方が足を止めてくださり、皆さまのご協力により合計7,740円の募金が集まりました。以下、学生の感想です。

- 乳がんの活動と伝えると、チラシを受け取られる方が多くいました。女性だけでなく、男性も受け取ってくださり、乳がんをより知っていただくことができたと感じました。今後も様々な活動が続けていきたいと思います。(1年 荒井姫妃・岡更紗・鎌倉結花・川上奈々里・川嶋穂乃果・北村心愛・近藤優衣・西村優衣)
- 多くの方に声をかけるなかで、「毎年検診を受けています」「がんばってね」と励ましの言葉をいただきました。温かい交流を通して、検診の大切さを改めて実感しました。(2年 田口華凜・武田遥花・岡部美月・橋本乃綾)
- 「病院が苦手」と話された男性に検診の意義を伝え、納得いただくことができました。性別を問わず理解を広げる重要性を実感し、診療放射線技師を目指す者として伝える力の必要性を感じました。(3年 田中千裕・富田あみ(部長))



第17回中部放射線医療技術学術大会(CCRT)が 本学で開催されました

保健衛生学部 放射線技術科学科 助教 鈴木 恵子

11月15日(土)、16日(日)の2日間にわたり、本学を会場として第17回中部放射線医療技術学術大会(CCRT)が開催されました。CCRTは、中部7県の診療放射線技術学を基盤とする日本放射線技術学会中部支部と中日本地域診療放射線技師会の2つの団体・学会が合同で企画・運営する学術大会であり、年に一度、中日本地域で開催されています。

2日間で700名を超える学会員・診療放射線技師の先生方が参加されるなか、今回は三重県で開催、しかも本学が会場ということもあり、当日は本学の2~4年生の学生も100名近く参加しました。初めて学会に参加する学生が多



かったと思いますが、実際に技師の先生方の発表を聞いて、専門性の高さ、難しさを実感しているようでした。しかし、謎解きやスタンプラリーなど、楽しい企画も多くあったため、緊張する場面もありつつ、楽しめたのではないかと思います。また、当日学生スタッフとして協力いただいた学生も数十名いました。会場の裏方の仕事や、技師の先生方への案内等、スムーズに対応していました。「来年も行きたい!」という学生の声も聞きましたので良い経験になったことと思います。

「ソーシャルワーカーデー in 三重」開催 実践から学び、専門職と交流

保健衛生学部 医療福祉学科 医療福祉学専攻 助教 佐脇 幸恵



12月7日(日)本学を会場として「ソーシャルワーカーデー in 三重」が開催されました。本イベントは、三重県社会福祉士会・三重県精神保健福祉士協会・三重県医療ソーシャルワーカー協会の三団体が共催し、ソーシャルワーカーの活動の推進と普及を目的としています。当日は医療福祉学専攻の学生もスタッフとして運営に参加しました。

今年度は、若手ソーシャルワーカーによる実践報告と、専門職と学生が交流する「ワールドカフェ」が行われました。実践報告では、本学卒業生の小出歩未さん(社会福祉士・精神保健福祉士)が登壇し、勤務先である児童家庭支援センターの「相談支援事業」「親子関係形成支援事業」「児童育成支援拠点事業」を紹介しました。さらに、子育て相談や産後うつ母親支援といった具体的な事例を挙げ、支援は施設内にとどまらず地域とつながり、多職種と連携して進める重要性を語りました。

ワールドカフェでは「子ども・教育」「医療」「高齢者」「障害者」「地域」「司法」と分野ごとにグループを設け、各現場で働くソーシャルワーカーから仕事内容や給与、福利厚生などについて直接話を聞く機会がありました。学生にとっては、専門職の実際の働き方や待遇に触れ、将来を考えるうえで参考となる貴重な時間となりました。

今回のイベントを通じて、多様化・複雑化する生活課題に対応するソーシャルワーカーの役割を改めて確認し、参加者全員で共有することができました。本学は今後も交流を重ね、教育と実践を結びつけながら、次世代の人材育成と地域福祉の発展に努めてまいります。

臨床実習(総合実習)と卒業研究を無事に終了して

保健衛生学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻 准教授 濱田 匠

リハビリテーション学科作業療法学専攻4年生は、令和7年4月から8月にかけて、三重県内を中心とした病院や施設で、9週間の臨床実習(総合実習)を2回実施しました。本実習は、これまでに学んだ知識や技術、そして医療人としての態度を含めた集大成となるものであり、無事に実施できたこと、実習地施設のご協力並びに臨床実習指導者の方々をはじめ、関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。実習報告会では、学生一人一人が対象者と真摯に向き合い、そこで得た学びをもとに、作業療法士の専門性や役割について力強く発表している姿が印象的であり、卒業後に作業療法士として働く姿がイメージできました。

また、昨年10月には卒業研究論文が受理されました。研究テーマは、身体障害、精神障害、発達、高齢期など多岐にわたり、いずれも人の「作業」や「生活」を見つめ直す貴重な内容でした。研究に取り組むなかで、慣れない作業に直面したり、思うように進まず試行錯誤を重ねたりしながら、自らの考えを整理し、仲間や教員と意見を交わして考え抜いた時間は、作業療法士に必要な資質を培う機会となったものと思います。

臨床実習と卒業研究で得られた経験が、卒業後に作業療法士として働く場面で大いに活かされていくことを願っています。

臨床工学科 第1回 卒業研究発表会を開催

医用工学部 臨床工学科 准教授 川合 真子

臨床工学科では、4年生が取り組んできた研究成果を報告する卒業研究発表会を、年2回に分けて開催しています。今回の第1回発表会では5研究室が発表を行い、自由参加であったにもかかわらず多くの3年生が聴講し、会場は熱心な雰囲気になりました。発表内容は、基礎医学実験、調査研究、信号処理、アクチュエーター、医療機器に関する検討など多岐にわたり、学生が主体的に取り組んできた成果が示されました。

発表を終えた4年生からは、次のような感想が寄せられています。

- 私は、滴下制御型輸液ポンプの流量誤差についての研究を行い、学会にも参加しました。専門家の前で発表を行うことは緊張しましたが、自分の考えを伝える力や準備の大切さなどを学ぶ貴重な経験になったと感じています。(辻田采陸さん)
- 卒業研究を通して自分自身の成長を感じることができました。教授をはじめ諸先生方にご指導いただき、自分たちで研究を行い試行錯誤し意見を交えることで、研究課題への理解、知識の深まりを実感し、有意義な経験することができました。(山口純平さん)

これらの言葉からも、卒業研究が学生にとって大きな成長の機会となったことがわかりました。本誌発行時には第2回発表会も終了し、4年生はそれぞれの研究を無事に締めくくりました。



ハワイ大学カピオラニ校 救急救命士コースとの国際交流(via Zoom)

保健衛生学部 救急救命学科 3年 河野 紗花・菊山 彪斗・久保 幸大

10月3日(金)救急救命学科の1年生と3年生が、ハワイ大学カピオラニ コミュニティカレッジの学生とZoomで国際交流を行いました。

私たちはこの国際交流に向けて楽しんでもらえるような学科紹介や、いくつかの質問をピックアップして英語に翻訳したり、交流先の学生からの質問への受け答えを練習したりするなど、入念に事前準備を行いました。それでも本番になるとなかなか難しく、先生の助けをお借りしながらがんばりました。

また、交流先の学生は実際の現場で活躍しており、私たちの講義や実習とは違った緊張感があるのだと感じました。言語や文化の違いを越えた、とても有意義な交流会でした。このような機会を与えていただいた平井聡子先生をはじめ、諸先生方、コミュニティカレッジの学生の皆さんや、その他関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。



「しょうぼうさい」に救急救命学科学生(P-BET)が参加

保健衛生学部 救急救命学科 教授 神藏 貴久

11月3日(月・祝)イオンモール鈴鹿で開催された「しょうぼうさい」に、救急救命学科の学生が中心となって活動している応急手当普及サークル「P-BET」の学生が参加しました。鈴鹿市消防本部と共通のイベントブースにおいて、胸骨圧迫を学習するためのゲームを準備しました。胸骨圧迫を含む応急手当は特別な技能が必要なものではなく、一般市民でも行える重要な行動として取り組んでいただけるような学習方法を提供し、その結果、行列ができるほどの盛況ぶりとなりました。

病院外で心臓が止まった人を発見した場合、一般市民が蘇生行動を行う割合は約50%と言われています。P-BETの活動は、主に幼稚園や保育園の職員、親子サロンの保護者などを対象に応急手当の普及を行ってきましたが、若年時からの応急手当教育が重要であるという結論に至り、今後は小学生、可能であれば未就学児にも応急手当の普及を実施していきたいと考えています。

最後に、応急手当普及サークル「P-BET」では新規メンバーを募集しています。学科を問わず、応急手当普及などの社会貢献に興味がある学生は、本学科2年生の水谷さんまでご連絡ください。



「第36回ふくしイベントふれあい広場鈴鹿」にボランティア参加

10月11日(土)鈴鹿ハンターにて、鈴鹿市社会福祉協議会が中心となって市内の各福祉団体等で構成する実行委員会の主催により「第36回ふくしイベントふれあい広場鈴鹿」が開催され、学生がボランティアスタッフとして参加しました。

イベント当日は足元の悪いなか、多くの方にご参加いただきました。学生はフードドライブによるバルーンアートコーナーの受付や整列、案内等を担当させていただき、子どもたちを中心に交流しました。

ボランティアに参加した学生からは「貴重な体験ができた」「小さなお子さまと一緒に楽しむことができ、参加して良かった」といった感想が聞かれました。

今後も地域の方との交流の場を大切に、活動を行っていききたいと思います。

＜ボランティアセンター＞



学友会とクラブ・サークル運営委員会協働 秋季清掃活動を実施

11月15日(土)学友会執行部員と執行部の呼びかけに賛同したクラブ・サークル部員17団体36名の学生が、秋季清掃活動を実施しました。今年度は、白子キャンパスや桜の森公園、キャンパス周辺など、4つのグループに分かれてゴミ拾いを行いました。

当日は天候にも恵まれ、参加した学生は積極的に清掃活動に取り組み、各グループともたくさんのゴミを拾うことができました。多種多様なゴミがあり、「こんな物まで!」という意外なものもありました。

今後も地域の環境美化に努め、大学周辺にお住まいの方に気持ち良く過ごしていただけるよう、また、私たちが気持ち良く通学ができるように、定期的に清掃活動を行っていききたいと思います。今回ご協力いただいた学生の皆さん、ありがとうございました。



＜学友会・学生課＞

絵画を寄贈いただき、感謝状を贈呈しました

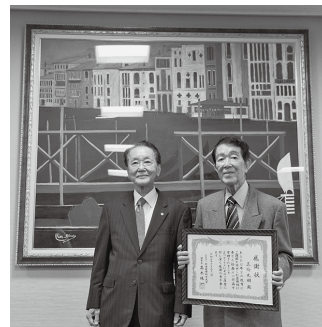
10月31日(金)洋画家の三輪光明様より絵画11点を寄贈いただき、ご厚意に対し高木純一理事長から感謝状が贈呈されました。

三輪様は新芸術展銅賞、愛知県知事賞、現創展特選、國美藝術展理事長賞など、多数の美術展で受賞されており、その実績により美術名典にも名を連ねていらっしゃいます。その中から100号サイズの大作11点をご寄贈いただき、白子キャンパス講堂に



9点、1号館会議室に2点を展示しました。

講堂に展示した「カーニバル」シリーズは、ベネチアの祭りを楽しむ場面があったり、おどけた様子を描いたり、祭りが終わる寂しさを夕暮れの中に表現するなど、人生の悲喜こもも感が感じられる作品です。11月に開催した碧鈴祭では、講堂の展示作品を学生や教職員だけでなく、来場者の皆さまにも鑑賞いただくことができました。



＜企画広報課＞

教育支援の会「保護者懇談会」および「第2回役員会」を開催

教育支援の会では、学生の様子や学業の状況などを保護者の方にご理解いただく機会として、毎年「保護者懇談会」を開催しており、今年度は10月5日(日)に実施しました。

昨年と同様に大学にお越しいただき対面での面談と、Zoomを使用したオンライン面談の二つのパターンで行い、遠方の保護者の方にも多数ご参加いただくことができました。



当日は約400名の保護者の方にご参加いただき、個別で学生の履修状況や進路・就職に関するご質問や、学生の日頃の様子などについて教員がお答えしました。今年度の保護者懇談会についても、ご出席いただいた皆様のご協力により無事に終わることができました。

また、同日に「教育支援の会 第2回役員会」を実施しました。役員会では、来年度予算案、寄贈品などについて話し合ったほか、就職状況の報告などがなされました。

今後も学生の諸活動の支援等を円滑に進められるよう努めてまいります。

＜教育支援の会事務局・学生課＞

推薦します

「60歳からの薬膳 ～食とツボで生涯イキイキ～」

著 者：副学長・日本薬膳学会 代表理事 高木久代

出版社：かざひの文庫

発行日：2025年12月11日



人は誰も健康に年をとり人生を閉じるまで自立して、美味しく食事をいただきたいと願っています。アンチエイジングといわれることも多いですが、日本薬膳学会では「ヘルシーエイジング」と名づけ、いつまでも元気でいられるような「健康長寿食」として、中医学の理論を背景にした「薬膳」と、西洋医学の栄養学を融合した「新しい薬膳」の普及に努めています。

本書は特に60歳以上に起こりがちな身体の悩みや症状別に、お勧めの薬膳食材や具体的な薬膳レシピを多数紹介しています。馴染みのない食材も、これを機に食事に取り入れていただければ、これまでと違った新鮮な献立ができ、食べるのが楽しく感じられることでしょう。その延長で健康になればどんなにいいことでしょうか。身体の不調を和らげる食養生とともに、ご自身でできる「身体のツボ押し」の基礎知識も解説しています。皆さまの健康増進にぜひご一読ください。

学生相談室通信

学生相談室長・保健衛生学部 医療福祉学科 准教授 綾野 眞理

「明日には目が見えなくなるかもしれないと思って、世界を見てください」

これは、ある新聞のコラム欄で紹介されていた、ヘレン・ケラーの言葉です。彼女は米国で1880年(日本では明治時代の半ば)に生まれましたが、幼少期の病気が原因で、視覚と聴覚に障害を持つようになり、言葉も不自由でした。家庭教師の献身的な指導によって能力を開花させ、後に作家、社会活動家として活躍した女性です。彼女の生涯は、伝記や映画、演劇などで度々紹介されていますので、ご存知の方もいらっしゃると思います。

彼女は、ある日、記者の「もし、3日間だけ目が見えるようになったら、何が見たいですか」との質問に対し、「1日目は自分を支えてくれた大切な人を見たい。2日目は人類のこれまでの歴史を見るために博物館や劇場に、3日目は働く人を見たい。見失いがちな本当に価値あるものを見極めてほしい」と答えたそうです。これから社会に巣立っていく皆さん、その準備をしている皆さんにこのことばを送ります。私も、初心に帰って、本当に価値あるものは何なのか、世界を見つめなおしてみたいと思います。



おじさんの
独り言

「ハイブリッド納豆」

おじさんは「納豆」が好きで、1週間に3、4回は食べている。と言うことは、2日に1度は食べていることになる。栄養がある、健康に良いということが後押ししているのも確かだ。それだけ食べると身体がネバネバにならないかって、なるわけないじゃん、Neverだよ。

おじさんが子供の頃は、納豆と言えば粒納豆、それも結構大きな粒の納豆だけしかなかったけど、今やスーパーの納豆売り場へ行くと、極小粒、小粒、中粒、大粒などの色々な「粒納豆」と「ひきわり納豆」が売られている。おじさんは、つい最近まで粒納豆しか食べたことが無かったんだけど、半年くらい前に初めて「ひきわり納豆」に挑戦した。どういう風の吹き回しかって？ いや、売り場で「ひきわり納豆」を見てたら「これ、どうやって作るんだ？」って疑問が湧いてきたんだ。粒納豆を細かく刻むのかな？ 生大豆を砕いてから作るのかな？ 蒸した大豆を刻んで作るのかな？ かな、かな、言っても、なかなか分かん。

調べてみると、「ひきわり納豆」は、生大豆を細かく砕いてから粒納豆と同じように作ることが分かったんだ。糸ひき納豆(普通の粒納豆)の歴史は、文献上は室町時代に始まるらしいけど、「ひきわり納豆」の歴史はそんなに古くはない。昭和の初め1930年頃に秋田県で作り始めたとか。何故って、秋田の大豆は大粒で納豆を作り難かったというのが理由らしい。そこで、石臼で挽いて小さくしたらどうかと試した人がいたんだって。初めの頃は東北地方の北部でしか作られてなかったけど、今から50年位前に大手の業者が

全国展開に乗り出したらしい。初めの頃は、ひきわりは「くず豆」で作っているのではないかなかなか普及しなかったそうだが、最近は全国的に普及しているよね。余談だけど、納豆の本場が茨木県の水戸と言われるようになったのは、江戸時代に水戸藩が大豆作りを奨励したにもかかわらず、水戸の大豆は小さめで味噌や醤油を作るのには適さず、納豆には最適だったからだと言う。秋田とは真逆だね。

疑問解消が糸を引き、いやいや、後を引き、「ひきわり納豆」を食べてみたくなったんだ。

口当たりがソフトで確かに美味しい。だけど、何か物足りないんだ。そこで、おじさん一工夫、粒納豆とひきわり納豆を半分ずつ混ぜてみたんだ。そうしたら、見事にマッチ。どちらかを単独で食べるよりも断然美味しくなったじゃん。粒納豆の食感を残しつつひきわり納豆の滑らかさがあって、絶妙な組み合わせなんだよね。おじさんの大発明。勝手に「ハイブリッド納豆」って命名しちゃったよ。

ところで、生豆を砕くとカワ(皮)が無くなっちゃうんで、栄養もカワ(変)っちゃうんだとか。「ひきわり」は、骨を強くするビタミンK2が粒納豆の1.5倍も多く、その上、たんぱく質が吸収されやすく胃腸にもやさしい。粒納豆は皮があるため、食物繊維が豊富で、カルシウムや鉄、亜鉛などのミネラルが多く含まれるんだとか。

両方が混ざり合ったハイブリッド納豆、栄養満点、しかも美味しナツと。



第17回イルミネーション点灯式を行いました

12月11日(木)白子キャンパスにて、第17回イルミネーション点灯式を行いました。例年同様、今年も多く地域の皆さまにご参加いただき、点灯式ではカウントダウンに合わせて、12万個のLEDが白子キャンパスを鮮やかな光で包みました。

今年度はサラナ保育園園児によるハンドベル演奏や、四日市メリノール学院聖歌隊による合唱、本学ボランティア学生によるトーンチャイム演奏、さらに津市在住のソプラノ歌手 村林浩代さんによるクリスマスソングのリサイタルを行いました。

点灯式の事前準備や当日の司会進行、募金の呼びかけや駐車場警備などを行った学生ボランティアたちは、学科や学年の垣根を越えて仲を深める良い機会となりました。

また、点灯式とあわせて赤い羽根共同募金の呼びかけを行いました。その結果、21,744円もの募金が集まりました。皆さまの温かいご支援とご協力、ありがとうございました。

寒いなかでの点灯式となりましたが、足をお運びいただいた地域の方々をはじめ、ご協力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

＜白子事務局＞



学友会

学友会主催「クリスマス会」を開催しました

12月18日(木)千代崎キャンパスにて、学友会主催「クリスマス会」を開催しました。

多くの学生が参加しましたが、豪華な料理やクリスマスケーキに驚き、美味しい料理に盛り上がるなど、会場は終始にぎやかな雰囲気に包まれていました。

特に、チーム対抗の「共通点探しゲーム」では周囲の学生とコミュニケーションをとりながら、全員の共通点をより多く見つけようと、初対面同士で話すきっかけになったり、お互いの共通点が話題になったりと、どのチームも積極的に声を掛け合う姿が見られました。制限時間6分で40個以上の共通点を見つけたチームもあり、驚きの声が上がっていました。ほとんど初対面であるにもかかわらず、自然と打ち解けて親睦が深まっていく様子がとても印象的でした。



短い時間の開催でしたが、学年・学部の枠を越えて楽しく交流し、授業や実習の息抜きの時間を提供できたのではないかと思います。次年度は、さらに多くの学生に参加していただきたいです。

最後に今回クリスマスパーティを開催するにあたりご協力いただいた皆さま、参加いただいた学生の皆さん、本当にありがとうございました。

＜学友会・学生課＞

行事予定

2026年2月～5月

2月12日(木)～13日(金)・16日(月)～18日(水)
後期・冬期 追・再試験

27日(金) 卒業判定会議

3月6日(金) 一般選抜B日程・総合型選抜(6期)
(千代崎:立入禁止)

7日(土) スポーツコンディショニングフェス・
大学院2期入試

11日(水) 学位授与式

20日(金・祝) 春のオープンキャンパス

23日(月) 進級判定会議

31日(火) 在学生ガイダンス・在学生健康診断

4月1日(水)・3日(金) 新入生オリエンテーション・
在学生健康診断

2日(木) 入学式

4日(土)・11日(土) 新入生健康診断

6日(月) 前期・春期 授業開始

25日(土) 補講日

29日(水・祝) 水曜授業日

5月6日(水・祝) 創立記念日

9日(土) 補講日

17日(日) 第1回オープンキャンパス(予定)

23日(土) 補講日

28日(木)～30日(土) 春期定期試験と解説

※上記予定は変更になる場合があります。A-Portalおよびホームページで最新情報を確認してください。